

No. 13 東京大学医学教育 国際協力研究センター

東京大学医学教育
国際協力研究センター

〒113-0033
東京都文京区本郷 7-3-1
医学部総合中央館 212
TEL 03-5841-3583
FAX 03-5802-1845

E-mail: ircleme@m.u-tokyo.ac.jp
http://www.ircleme.u-tokyo.ac.jp

表題：海野 濤山書



インドネシア大学の教育病院で実習する医学生ら

International Research Center for Medical Education

CONTENTS

| | |
|--|--|
| ◆センター長就任のご挨拶.....2 | ◆イスラム大学医学部、インドネシア大学訪問.....5 |
| センター長 山本 一彦 | センター講師 大西 弘高 |
| ◆武田裕子前准教授 離任挨拶2 | ◆国際協力銀行「インドネシア大学整備・保健医療人材育成事業」に係る案件形成促進調査5 |
| 前・センター准教授 武田 裕子 | センター研究機関研究員 片山 亜弥 |
| ◆錦織宏助教 着任挨拶3 | ◆アフガニスタンでの National Workshop 開催6 |
| センター助教 錦織 宏 | 前センター准教授 武田 裕子 |
| ◆片山亜弥・研究機関研究員 着任挨拶3 | ◆アフガニスタン出張記.....6 |
| センター研究機関研究員 片山 亜弥 | センター教授 北村 聖 |
| ◆賈 志敏・客員研究員 着任挨拶3 | ◆JICA アフガニスタン医学教育プロジェクト短期専門家派遣：マレーシアでの研修7 |
| 客員研究員（笹川奨学生） 賈 志敏 | センター講師 大西 弘高 |
| ◆「第24回医学教育セミナーとワークショップ in 東大」報告4 | ◆一時移転の報告.....7 |
| センター講師 大西 弘高 | センター事務補佐員 野原木綿子 |
| ◆北京訪問記.....4 | ◆センター日誌.....8 |
| センター教授 北村 聖 | センター事務補佐員 野原木綿子 |

センター長就任のご挨拶

センター長 山本一彦（アレルギー・リウマチ内科教授）



長年務められた加我君孝先生に替わり、4月よりセンター長を拝命いたしました山本です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。10年前に私が本郷に赴任してきたときには、大学院制度改革などは既に進行中でしたが、医学教育に関しては、まだ古き良き時代の考え方が多く残っていました。当時の石川学部長のもと、委員会が作られ、私も参加させていただき、他大学と比べて遅れている東大の医学教育をどうするかをいろいろ議論しました。それがその後の桐野学部長の時にも継承され、いろいろな改革が行われました。加我先生はその中でいつも中心的な役割をお果たしになっておられました。

私は、国際交流室の室長を拝命していたこともあり、少し違う角度からも東大の医学教育を眺めることができました。現在の京都大学の福原俊一教授が、当時、国際交流室の講師であり、我が国でやっと根付きつつあったEBMの旗振り役のお一人でした。その縁で、EBMから見た医学教育も少し勉強させて頂きました。そして、福原先生を中心に申請書類を纏め上げて、やっと文部科学省から認められたものが本センターでした。ただ、当初、東大側は我が国の医学教育の充実、すなわち、欧米のシステムの良いところを我が国に導入し、我が国に適したものにするという方向に焦点を置いたものを想定していたのですが、文部科学省との話合いで、それと同時に発展途上国への医学教育についての貢献の役割もミッションに入ることになりました。

幸い、加我先生がセンター長におなりになりましたが、福原先生はすぐに京都大学の教授になられ、短い併任の期間を経て、完全に京都大学へ移られました。センターの方向性に若干の不安感がよぎりました。しかし、その後、多くの先生方が教員として加わり、現在のように、我が国の特に東大の医学教育の充実とともに、途上国への医学教育の普及という2つのミッションを遂行する拠点として、ユニークな機能を果たしつつある立派な研究センターとなっていることは皆様もご承知の通りです。

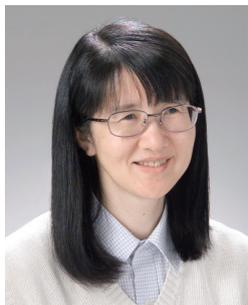
加我先生は、ある意味ではぐいぐいとセンターをひっぱって行かれるタイプでした。しかし、私にできることは、どちらかというところ、センターの教員、職員の皆さんが思いっきり仕事ができる環境を確保出来るようにすることであろうと考えております。我が国の医学教育だけでなく、現在、途上国への医学教育の普及のミッションでは、アフガニスタン、そして新たにインドネシアなどへとプロジェクトは広がって行きます。従って、安全にそして有意義な活動が出来るような環境の整備がとて重要になってきます。

そして、これらの活動が若い医師にとって魅力的であることも重要な要素です。医学教育とそれを通じた国際協力が、医師が将来活躍するフィールドの一つとして捉えられ、一人でも多くの若い仲間が参加してくれることを期待したいと思います。



離任のご挨拶

センター前准教授 武田裕子



2005年10月より准教授としてセンターの一員に加えていただいておりますが、2007年8月1日付けで三重大大学院医学系研究科地域医療学講座教授を拝命し、センターを離れることになりました。在職中は、加我君孝名誉センター長、北村聖主任教授に温かいご指導を賜り、短期間ながら山本センター長にもたいへんお世話になりました。大西弘高講師や機動力と底力で

センターを支えている頼もしい事務補佐員の皆様には影に日向に助けていただきました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

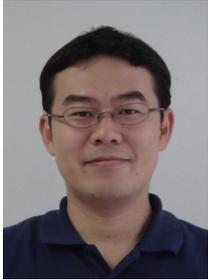
着任当初は、センターに貢献できるのか実は不安でした。しかし、私の前任の大滝純司先生（現・東京医科大学教授）がきめ細かに授業資料を整えてくださっていたおかげで、全く戸惑うことなく実務を進めることができました。臨床診断学実習やPBL-チュートリアル、教務委員会委員、病棟管理医と具体的な役割を

与えていただき、そのひとつ一つに取り組むなかで、医学部の先生方とも親しくお話させていただく機会が増えました。学生の皆さんとの学びも刺激的で、振り返ると楽しい思い出ばかりです。特にM2で行うOSCEは、毎年準備から実施まで3ヶ月ほど要し緊張しましたが、臨床系の先生方にステーション・リーダーや評価者としてご協力いただき、無事に終えることができました。ご参加くださった先生方、本当にありがとうございました。

地域医療学講座の活動を始めて2ヶ月経ちましたが、センターで国際協力の世界に触れたことがたいへん役立っています。地域の課題とニーズを把握し、他所から新しいものを自分たちの尺度で優れていると押し付けるのではなく、その地域のリソースを十分に知り活用して、地域の方たちの手で続けられる活動をいっしょになって考える。このことを忘れずに今後も地域医療の研究・教育に携わって参りたいと存じます。教室のミッションの一つには国際協力を掲げています。センターとのコラボレーションが実現するのを楽しみにしています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

着任挨拶

センター助教 錦織 宏



2007年10月1日付で助教として着任いたしました、錦織宏と申します。この場をお借りして御挨拶申し上げます。

私は平成10年に名古屋大学を卒業いたしました。初期研修を市立舞鶴市民病院で行ったのですが、大リーガー一医による米国流の医学教育を受けて内科学の面白さ・奥深さに強烈に惹かれるようになったことから、医学教育に強い関心を持つようになりました。その後勤めた愛知厚生連海南病院で臨床研修改革に大きく関わる機会があり、その経験の中で医学教育学（特に理論）を学ぶ必要性を認識しました。平成16年に名古屋大学総合診療部の大学院に進学後、平成17年夏より渡英し、医学教育振興財団のリサーチフェローとして1年間オックスフォード大学に、そしてその後1年間はダンディー大学医学教育学修士課程に在籍して、医学教育学全般に関する勉強・研究を行ってきました。

今回縁あって当センターで教員として働かせていただくことになったことをありがたく思うとともに、今まで諸先輩方が作られてきたものをさらに発展させられるよう、Listen and Learn を大事にしながら研鑽していく所存です。若輩者ですが色々と御指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

研究機関研究員 片山亜弥



2007年7月1日付で、研究機関研究員として着任いたしました。これまで医学教育に携わった経験はありませんが、新たな分野から国際協力に関われることを日々楽しく感じています。

私は、慶應義塾大学商学部を卒業後、通信会社で勤務しましたが、大学時代に関心を持った途上国支援に将来的に携わりたいと考え、退職後にアジア経済研究所の開発スクールにおいて開発学全般について学んだ後、ロンドン大学の人口と開発コース修士課程を修了しました。日本帰国後は、国際協力銀行（JBIC）において2年半、フィリピン及びパプアニューギニアの新規円借款の案件形成及び既往案件の監理に携わりました。JBICでは、コンサルタントや専門家の協力を得ながら案件内容を検討するとともに、途上国政府・日本政府等の様々な意見を調整しながら総合的に案件を形成し、非常に勉強になりました。しかし、担当した案件のほとんどが大型インフラ案件であり、今後は保健セクターや教育セクターのようなソフト分野から国際協力に関わりたいと思い、センターの活動に大変関心を持ちました。

早速9月には、JBICの「インドネシア大学整備・保健医療人材育成事業」案件形成促進調査のためジャカルタに出張する機会を頂き、JBICでは経験できなかったことを学ばせて頂いて光栄に感じています。医学教育についてはまだまだ勉強中の身ですが、引き続きご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

客員研究員 賈 志敏 (Zhimin Jia)



I feel honored to have this precious opportunity to join IRCME from April 2007. After graduating from Southern Medical University (SMU) in 1990 majoring in clinical medicine, I worked at SMU first as a clinical doctor in the department of Otorhinolaryngology of Nanfang Hospital till 1994, then as a staff member of the Education Department from 1994 to 2005. In 2005, with the establishment of the School of Pharmaceutical Sciences of SMU, I was transferred to this new school to be in charge of pharmaceutical education.

With great enthusiasm, I have been engaging in many aspects concerning medical education, including curriculum development, teaching methods, students' quality evaluation etc. I have also carried out several research programs sponsored by different agencies besides my daily educational management work.

Now China is striving to reform its medical education in order to keep up with the rapid development of medical education around the world, aiming to cultivate more and more highly qualified medical personnel to meet the ever increasing healthcare demands of the people. A lot of research, reform and evaluation in medical education are being fully developed throughout China. As one of the key medical universities of our country, SMU is surely taking an active part in this extensive medical education reform.

Thus, here, at the prestigious Tokyo University and especially in this renowned IRCME, it's my pleasure and responsibility to make good use of this valuable one-year research opportunity so that I can contribute more to medical education in my home country and university. To learn more, to experience more, and to make a lot of progress, that's my plan. Also, I'd like to regard IRCME as a window for me, through which, I look deep into advanced medical education at the world level, to make contact with the society and colorful culture of Japan, and to communicate friendship.

「第24回医学教育セミナーとワークショップ in 東大」報告

講師 大西弘高

2007年4月28～29日の週末二日間、東京大学本郷キャンパス内山上会館において、岐阜大学医学教育開発研究センター（MEDC）及び東京大学医学教育国際協力研究センター主催「第24回医学教育セミナーとワークショップ in 東大」が執り行われた。岐阜大学 MEDC は全国共同利用施設であり、年4回のペースで同様のワークショップを開催し、通常1回おきに他の施設との共同開催の形をとっている。今回、そのワークショップが初めて東大と合同で行われるに至った。

| 4月28日（土） | | | | |
|-------------|---|-------------------|--|---------------------------|
| 12:00～13:00 | 受付 | | | |
| 13:00～17:00 | WS-1 医学教育専任部署の役割 | WS-2 総合内科の教育 | WS-3 Professionalism とは何か・ どう育むか | WS-4 省察的实践 / Portfolio |
| 17:00～17:15 | 休憩・移動 | | | |
| 17:15～18:15 | 大会議室（2階）Seminar - 1 Portfolio (Dr. Driessen, MEDC 客員教授) | | | |
| 18:15～18:30 | 休憩・移動 | | | |
| 18:30～20:00 | 懇親会（レストラン） | | | |
| 4月29日（日） | | | | |
| 8:30～9:00 | 受付 | | | |
| 9:00～12:00 | WS-5 国家試験のグランドデザイン | WS-6 外来診療教育の未来 | WS-3 Professionalism とは何か・ どう育むか | WS-4 省察的实践 / Portfolio |
| 12:00～12:15 | 休憩・移動 | | | |
| 12:15～13:00 | 大会議室（2階）Seminar - 2 「医療改革時代の教育」（永井良三先生、東京大学教授、前医学部附属病院院長） | | | |

主に東大側で担当したのはWS-2の「総合内科の教育（佐賀大小田康友先生とセンター講師大西弘高）」、WS-5の「国家試験のグランドデザイン（センター教授北村聖）」、そしてSeminar-2の「医療改革時代の教育（永井良三先生、東京大学教授、前医学部附属病院院長）」であった。

「総合内科の教育」では、内科・総合内科がどうあるべきかについての講義の後、シナリオを用いたグループでのディスカッションを題材とした。「大病院（大病院レベル）の運営委員会で教育のために総合内科が必要であると決定された。病院の地理的環境、地域の医療ニーズ、専門科の充実度、卒前・卒後教育への比重（大学かそうでないか）などについて各自で決定し、方向性を打ち出し、総合内科で提供する臨床実習、卒後研修（初期・後期いずれか）のカリキュラムを考案すること」というテーマで各グループが討論した。総合内科をイメージしやすい人、しにくい人でディスカッションへの参加度が違った可能性があるが、総合内科の必要性、運営の困難さについては意識共有が図られたように思われた。

「国家試験のグランドデザイン」では、筆記試験がMCQのみでよいかどうか、OSCEのような技能試験をふくめるべきかといったディスカッションがなされた。永井先生の講演「医療改革時代の教育」では、大病院がどうあるべきかという点から、その大病院を教育リソースとしてどう活かしていくべきかについてまで、分かりやすくしかも実体験を踏まえたお話を聞くことができた。

北京訪問記

教授 北村 聖

日中笹川医学奨学金制度20周年記念式典に参加する目的で8月18日から21日まで北京に行ってきた。この制度は、日中両国民の友好と協力を医学分野で推進させようと1996年に設立された。20年計画で中国の保健医療の向上のために努力する専門家2000名をわが国に招聘し、日本の医療機関等でそれぞれ研鑽を積んでもらおうというものだ。

これまで1700名の研究生が来日し、当センターにも3名の研究生が来日した。1700名の研究生の受け入れ先では、東京大学が107名と一番多く、京都大学78名、大阪大学66名、東北大学59名の順になっている。

記念式典では、700名あまりの留学経験者と450名余の日本人指導者が参加して北京の人民大会堂で行われた。東京大学を代表して、私が感謝状と記念の楯を頂いた。総勢1200名の会議・式典であるが、会場が大きく天井が高いためそれほど大勢が集まっているとは感じなかった。

圧巻は1200人の集合写真で、カメラを中心に半径15mでカメラを取り囲むように全員が7、8段で、270度くらいの円弧に並ぶ。撮影は端からカメラと照明がぐるーっと秒速10度くらいの速度で回転していった。できた写真は巻物のようであった。この奨学金制度は、来年から規模が縮小されるそうだが、医療水準の向上を通じて知日派の医師や医学・医療のリーダーを育成し、この分野における日中の人的・学術的交流の基礎を築く事業としても重要な意味をもつとよいと思う。

我々のところで研究された先生方は以下の3名である。

- 平成17年度 日中笹川医学研究者制度第28期研究者
耿景海氏
(中国南方医科大学 講師)
- 平成18年度 日中笹川医学研究者制度第29期研究者
鄧明俊氏
(中国協和医科大学研究生院培養学位処 助理研究員)
- 平成19年度 日中笹川医学研究者制度第30期研究者
賈志敏氏
(中国南方医科大学 副教授)

翌日は東京大学医科学研究所と共同研究している文部科学省委託費新興・再興感染症研究拠点形成プログラム「中国との連携を基軸とした新興・再興感染症の研究」の一環として、中国科学院微生物研究所の中日連合実験室を訪問した。

副所長、日本人スタッフ、中国人スタッフ、中国大陸院生にインタビューし、中国での医学研究者養成の制度と現況を調査した。中国では、臨床医の待遇がそれほどよくないために多くの医師が研究者への道を選ぶようだ。そして、ほとんどが米国か欧州への留学を希望していた。日本への留学希望は少なく、日本の受け入れ態勢の問題、研究の国際性的の問題などいくつかの課題があるような印象を受けた。

イスラム大学医学部、インドネシア大学訪問

講師 大西弘高

5月1～3日という短い日程であったが、このたびイスラム大学医学部とインドネシア大学を訪問してきたので報告したい。

ジャカルタ郊外の Tiputat に位置するイスラム大学医学部には、2005年2～3月に国際協力銀行（JBIC）の「インドネシア国立イスラム大学保健医学部整備事業に係る調査」で北村教授及び私の前任であった水嶋講師が訪問した経緯があった。2005年3月に借款契約が締結され、2005年秋からはとりあえず保健大学の校舎を間借りする形で医学部の授業が開始された。しかし事業のソフト面で情報不足との評価がなされ、2005年9～12月に九州大学医学教育学講座の吉田素文教授らのチームが「国立イスラム大学保健・医学部整備事業に係る調査」に入っていた。

2007年5月時点でイスラム大学医学部校舎建設の計画が進行中であったが、留学生の仲介については、NPO法人アジア科学教育経済発展機構（ASIASEED）がJBICより本件を落札していた。このたび専門家の判断を仰ぎたいとの要望で、5月1～2日の2日間イスラム大学医学部教員の日本国内学位プログラム応募者選定プロセスとしての面接を実施する目的で九州大学の吉田教授と共に訪問した。まずは、以前日本に挨拶に来られたことがある Tadjudin 医学部長と会い、今回の学位プログラムの方向性等について話し合った。その後、2日間で32名の応募者に対して英語で面接を行った。基本的には先方で留学先の教室を選び、受け入れ可否の返事をもってもらうことが望ましかったが、情報不足等の理由により、その段階には至っていなかった候補者も多数いた。また、英語能力が著しく低い、あるいは研究テーマが全く絞り込めていない者については、対象から外すように指示をした。



イスラム大学医学部

サレンバのチプト病院にある長い廊下

なお、本件については ASIASEED が引き続き対応中である。

近々インドネシア大学の整備事業に関して JBIC から公募が出るとの情報があり、5月3日には、ジャカルタ市サレンバのインドネシア大学医学部とデボック市の医学部移転及び大学病院新設の予定地を訪問した。インドネシア大学医学部と JBIC との間では「大学病院建設がどのように貧困削減に役立つのか」といった業務の方向性に関する議論がなされていたため、その観点でも意見交換することができた。PBL 中心の臓器系統別カリキュラムがスタートするなど変革スピードは速くなってきているが、臨床分野が専門分化し過ぎた弊害で臨床教育が弱い点などが明確になった。

国際協力銀行「インドネシア大学整備・保健医療人材育成事業」に係る案件形成促進調査

研究機関研究員 片山亜弥



JBIC 職員及び調査団員とともに、インドネシア大学医学部前にて

国際協力銀行（JBIC）の2007年度融資候補案件の一つである「インドネシア大学整備・保健医療人材育成事業」に関し、2007年8月27日から9月28日まで、案件形成促進調査（Special Assistance for Project Formation : SAPROF）の第一回調査が実施された。SAPROF 調査団の医療人材開発政策専門家及び医学研究専門家として、北村教授が8月29日から9月4日まで及び9月17日から21日まで、大西講師が9月19日から27日まで、ジャカルタにおいて現地調査を行った。また、私は業務調整担当

として、8月29日から9月27日までジャカルタに滞在した。

インドネシアでは、保健セクターへのアクセスの地域間格差や医療の質の差、医師やヘルスケアワーカーといった医療人材の地域間の偏在、医師の絶対的な不足等が問題になっている。このような背景を受け、本事業では、インドネシア大学の大学付属病院の新設、医学部及び歯学部移設、看護学部及び公衆衛生学部の改築、及び地方大学医学部等との連携強化を行うことにより、インドネシア大学の医学系の高等教育の拡充及び研究活動の強化、並びに地方大学の医療人材の質向上を図り、地方を含むインドネシア全体の医療サービスの質の向上に資することを目的としている。

SAPROF 第1回調査では、事業の目的と方向性に関するインドネシア関係機関との協議、インドネシアの保健医療系教育セクターの現状と課題の把握、地方の医療サービス改善に必要な総合医の育成に関する提言等を行った。協議をしたインドネシア関係者の中には、医療人材の量的向上を重要視する声はまだ根強く、若い医師も専門医志向が強いと思われることから、医療人材の質の向上及び総合医の育成の必要性について、引き続き協議が必要であると思われた。

今後は、第1回調査でまとめた中間報告書に対して JBIC からコメントを受け、コメントに対応するための調査として10月下旬に第2回調査を実施し、12月初旬までには最終報告書を纏める予定である。

アフガニスタンでの National Workshop 開催

前准教授 武田裕子



JICA事務所の中原所長(右)と高橋調整員(中)とともに

JICA アフガニスタン医学教育プロジェクトも折り返し地点を迎えた昨年12月、北村聖主任教授から「WHOの協力を得てカブール医科大学(Kabul Medical University: KMU)でワークショップ(WS)を開いてはどうか」という提案がなされた。2003年

開催のWHOワークショップ後に生じた変化やプロジェクトの成果を明らかにして、他の地方大学にも知ってもらおうという狙いであった。そしてついに、2007年5月29日から3日間の日程で、KMU主催、JICA・WHO・フランス大使館後援による「National Workshop on Medical Curriculum for Afghanistan 2007」が開催された。校門から講堂入口まで赤絨毯が敷かれ、校舎壁面にも講壇にも大きなアフガニスタン国旗が飾られた。公衆衛生省大臣をはじめWHO代表やJICA所長の御祝辞があり、WSは始まった。

国内の各医学部・医科大学から数名ずつ教員が招待され、海外の支援団体の来賓も交えてKMU教員との情報交換や討議がなされた。このWS開催に向けて準備委員会が組織され、KMUの教員自らが自主的にカリキュラムの改訂に取り組んだことは特筆に値する。また、JICA研修生として来日された先生方がリーダーシップを発揮して活発

に議論を進めておられ、たいへん頼もしく感じられた。一方、ワークショップ3日前に私達が到着した時点では、グループワークの課題が未検討でファシリテータはその役割を知らされておらず、基調講演の演者やテーマも確定していないなど実務面では課題満載であった。WS開催に必要なスキル伝達の必要性を切実に感じた次第である。

当日は受付設営が予定より遅れ一人でキリキリしていたところ、元研修員が「アフガニスタンでは必ず時間より遅れて始まるから大丈夫」と慰めてくれた。また、タイトな時間割のなか、偉い方々ほど話が長くなるので困ると若手の先生がいわれるので、5分前になったら合図を送ろうかと提案したところ、とてもよいアイデアだけどそんな失礼なことはとてもできないと即座に却下されてしまった。大講堂で、「偉大な教授の先生方(great professors)」が会場から次々に立ち上がって滔々と自説を述べられ、議論が混とんとしていく様子を眺めながら、私は3度目の渡航にしてようやくアフガニスタンの本来の姿に触れることができたような気がしていた。

そのようななか一人の学生が立ち上がり、「学生は切実に医学を勉強したいと思っている。政治的な思惑に振り回されず、自分たちのための医学教育にしてほしい。」と流ちょうな英語で訴えた。一瞬シーンとした会場からはすぐに非難の声が上がったが、その勇気は海外からの参加者の心を打つものであった。教育は学生中心(student-centered)であるべきという大原則がアフガニスタンで当たり前になったときに、私たちのプロジェクトの真の成果が現れるのだと感じた。そのときが1日も早く訪れることを願いながら、会場を後にした。

アフガニスタン出張記

教授 北村 聖

5月30日 WS2日目

大西、足立両先生の基調講演の後、熱心なワークショップをしている。午後はワークショップの発表会。4時から精神科病棟の開院式がオーデトリウムで開催された。カルチャーナイトといって音楽を聴きながら夕食をする予定が、2時間近く待っても音楽の1曲だけで終わる。

5月31日 WS3日目

午前中に看護の基調講演があり、その後医学と看護に分かれて討論する。医学は昨日までの議論の発表があり、バーナヤール教授のまとめがよくまとまっていて感動した。

午後の議論では、いろいろなことが採決でまとまって行ったようだ。ダリ語のためあまり良くわからないが、stomatologyをdentalにするとか、pediatrics学部を廃止して、medicalだけに統一するとか、基本的なことが大胆にもホールの議論と採決で決まった(注: stomatologyは歯学部の名。Faculty of Pediatricsを設けるのと同様、旧ソビエト連邦式医学教育制度の名残を廃止することを決定した)。殆どが正論ばかりで文句は無いけれど、文化の違いに驚く。教養教育であるPCB(physics, chemistry and biology)を無くするかどうかでずいぶん議論がされ、これだけは先送りになった。

地方の大学の先生が、地方格差の是正について訴えにきた。ヘラートは良い所ようだ。夜は、ドイツレストランで、ビールを2杯飲む。

6月2日

朝8時に出発。KMUではWSの振り返り、オバイド学長への挨拶。WHOのイゼルディン先生も振り返りに参加する。

6月3日

雨がすごかった。夕立のように、あたりがにわかにかきくもり、雷とともに大粒の雨が降り出したかと思ったら、あられ混じりの土砂降りになって、水もあふれんばかりです。

朝6時頃、武田先生が帰国の途に着く。イスラマバードまで国連機、そこで12時間ほど待って、タイ経由で日本に戻るはず。

6月4日

産科のマライ病院を見学。手術室で帝王切開と逆子の2例の出産を見ることができた。大西先生がおなかを壊して、マライ病院でダウン。

KMUの女子学生寮がオープンしたので見に行く。すばらしくきれいだけれど、一部屋8人で16人でトイレ二つとシャワーがひとつ。こりゃ大変だ。

昼食をかねて、結核プロジェクトへ見学に出かける。磯野先生、高橋さん、検査技師の三浦さんが温かく迎えてくれる。お昼は韓国料理

店から取った海苔巻き。懐かしい。

国立結核研究所は官庁部分と、病院部分がある。病院は思ったよりもみすばらしい。結核プロジェクトも大変と思う。

6月5日

授業を見る。バーナヤール教授やほかの顔見知りの先生が授業している。アクティブレクチャーが行われて、学生の反応もよい。活動の年間計画を立てる。マレーシアでの研修も決まる。どんどん時間がなくなってしまう。

夕食は香港(中華料理店)で会食。ビール2本とワイン一杯。

6月6日

午後学生たちが集会を開いているので、何かと聴いたら、カルザイ大統領に明日会うので要望事項をまとめているとのこと。

午後はWHOにいくつもりで出かけたが、ジャララバード道路が大混雑で、たどりつけずに戻ってきた。

夜、すごい下痢でした。コレラではないかと思うくらい。30~60分に一回水様便がどばっと出ました。下痢を○行と数える意味がわかりました。

午後9時頃からうんうんになって、腹部膨満感と腸蠕動に伴う痛みで、本当に死んでしまうかと思う。毛布を抱きかかえてうなっているとほんとうに心細くなる。

深夜2時ごろからずいぶん良くなり、朝になったらかなり回復した。ポカリスエットが良かった。

そんなに変なものを食べていないので、細菌性ではなく、この脂っこい食事についておなかが耐えられなくなって下痢だったと思われます。

6月7日

朝食は、コーヒーとナンだけ。

大学の裏庭に行く。内科病棟外科病棟、破壊されたままに残っているが、外科のほうはタイルが張られており改修されるかもしれない。学長に会い、挨拶。今後の予定を決める。それから日本大使館に挨拶。最後に、JICA所長に終了の報告。いま食べたいのはおさかな。お刺身でも焼き魚でもいいです。白いご飯にのりの佃煮もいいね。

6月8日

朝6時に国連機でカブールを発って、10時にドバイに着く。ドバイ発が翌早朝の2時です。15時間の待ち時間。空港に荷物を預けて、ドバイの大形ショッピングセンターに繰り出す予定です。宝石や毛皮などが豊富にあります。自分には関係ないですが…金色の時計やプレスレットが所狭しとあり、御徒町の宝石店や香港の宝石店のような下品さを感じた。毛皮はすごかったです。ロシアの人が買い付けに来るら

しい。現地はすでに40度を越える熱さというのに…

あるショッピングセンターでは365日人工雪があり、スキーができる。砂漠のスキー場。オイルマネーはすごい。

ドバイの砂漠のゴルフ場を見学。海水の淡水化により多くのゴルフ場は日本と同じ芝生が青々していますが、一番古いドバイカントリークラブだけいまだに全てが砂漠です。

グリーンはコーラルを固めた上に薄く砂を引いてあります。生意気にバンカーもあります。バンカーで無いところはゴルファーが持って歩いている小さな人工芝マットを引いて打てるようだ。それにしても熱かった。気温45度。そこまでしてゴルフをしたいですかねえ？

空港の待ち時間が長いので、足掛け30時間をかけて帰国することになります。ドバイの待ち時間14時間が響いています。

6月10日

午前2時にエミレーツ機に搭乗。ようやく1時間ほど寝付いた頃辺りが騒がしい。人が倒れているとのこと。まさにすぐ横の通路に人が倒れており、救急の実践モードになる。意識、呼吸の確認と血圧の測定、それと同時に大西先生を呼んでもらう。血圧が低ければ神経に異常所見なく、交代で様子を見ることに。結局、到着前2時間だけ寝れる。我が家に入ったのが9時過ぎで、お刺身と焼酎が美味しい。

JICA アフガニスタン医学教育プロジェクト短期専門家派遣： マレーシアでの研修

講師 大西弘高

JICA アフガニスタン医学教育プロジェクトは2005年7月より3年間の予定であり、いよいよ最終年度を迎えた。以前当センターの研究機関研究員を務めた足立拓也氏が、2007年5月より長期専門家として現地でプロジェクト終了時まで滞在予定となっており、当プロジェクトも内容の定着を推し進めるべき時期と言える。

2007年9月3日から大西が短期専門家として派遣されることになったが、その中心となるプログラムはマレーシアのInternational Medical University (IMU) にて9月4～7日に実施された研修であった。ねらいは、同じイスラム国家であるマレーシアにある医学部がどのような理念の下で、どのようなカリキュラムを実施しているか、運用時のコツがあるかといった点に関して現場で学んでもらうことであった。

研修メンバーについては、2007年5～6月のカブール医科大学(KMU)訪問時に学長らと概要を話し合い、JICA側から大西(チーフアドバイザー)、足立拓也専門家(医学教育アドバイザー)、Mr. Aminullah Mayar (ナショナルスタッフ)、KMU側からDr Obaidullah Obaid (学長)、Dr Baray Siddiqui (教育担当副学長)、Dr Hedayatullah Salehi (教育開発センター長)、Dr Abdul Majeed Hosham (教育開発センター卒業教育委員長)、Dr Abdul Hanan Safi (内科教授)となった。

大西は日本から直接マレーシアに赴き、他の7名はアフガニスタンからデリー経由でマレーシアに至った。ちなみに、IMUは大西が2003年5月から2年間教員として勤務していた施設であり、現在も客員准教授である。今回のプログラムも、IMUの医学教育センター長であるProfessor Ramesh Juttiと大西との間でやり取りして決定された。

オープニングは9月4日9時15分より、IMU学長のDr. Mei Ling Young、医学部長Professor Victor Lim、在マレーシア・アフガニスタン大使Mr. Mohammad Yunos Farman、在マレーシア日本大使館一等書記官小野雄大氏、JICAマレーシア事務所プロジェクト形成アドバイザー(南南協力/アジアアフリカ協力担当)大野政義氏らの出席によって執り行われた。両国大使館やJICA現地事務所への連絡はIMU側によって手配されていた。

1日目の研修では、IMUの身体系統別カリキュラムについて概要が示された。PBLと講義のハイブリッド方式に、CSU (Clinical skill unit)での診察技法教育も組み合わせられた世界的にも先進的なモデルである。PBLに関してはその特徴が講義で示され、10月4日と7日の2回見学もした。シナリオの配布後、学生が討論により学習課題を構築していくPBL1回目では、KMUとIMUとで本質的な違いはないという意見も聞かれた。しかし、PBL2回目では、学生が3日間で自己学習を進め、内容を雄弁に発表し、さらに討論を進めていたため、Dr. Siddiqui, Dr. SalehiもIMUのPBLが非常に優れていると感じたとの

ことだった。

2日目は、クアラルンプール郊外のSeremban市にあるIMU臨床分校を見学した。まずは、IMUのTBL (Task-based learning)の説明がなされた。これはCase-based learningの中でも特に臨床症状を基盤とし、例えば尿尿への対応、腹痛への対応といった課題を病棟研修、外来研修の中で見出し、それをグループで持ち寄り振り返るタイプの教育/学習方略である。TBLとCBLの異同といった点で混乱が生じたようにも見えた。

3日目は、カリキュラムのより細かな側面に関する研修であった。まず、臨床前カリキュラムにおいてOSCEとObjective structured practical examination (OSPE)を行っている状況等について説明がなされた。早期臨床体験実習については、IMUでは大病院、小規模病院、診療所等を組み合わせた体験が得られるように工夫されていた。IMUの教務部の事務員も教育や評価の手順について、事務員がどのように援助しているかを示す講義をした。午後には医学博物館や図書館の見学が行われた。医学博物館では各種マネキン人形、解剖学などの図譜等が各臓器系統別に配置されており、自己学習がしやすくなるよう配慮されていた。また最後に、IMUでのFD活動についての説明があった。KMU側は、教務部での取り組みも含め、教育の質向上、質管理という考え方が基盤にあることを理解できたようだった。

4日目は、まずCSUでの教育風景を見学した。この日は呼吸器コースの1週目であり、胸部X線写真の読影法に関する講義だったが、1学年200人のクラスが5～6グループに分けられ、この日はそのうちの1グループだけが参加していた。また、さらに小グループに分かれてからピークフローメーターを各自吹き、年齢や身長に対する標準値と比較する実習が行われた。その後、ナイジェリアとミャンマーの出身者を含めたCSUの教員らとの討論がなされた。彼らも旧態依然とした教育を受けたが、IMUで新しいカリキュラムに触れ、身体系統別カリキュラムの利点を感じているとの意見が出た。KMU教員は、IMUのカリキュラムが発展途上国においても役立ちそうな印象を持ったようだった。

アフガニスタン帰国後、9月11日12時からマレーシアでの研修内容報告会がKMU内で実施された。最初に、Obaid学長から10分ほど研修概要を含めた話があった。ダリ語だったので詳細は不明だったが、organ-based curriculum、OSCE、PBLなど色んなキーワードが学長自らの口から出てきて、傍目にインパクトがあった。その後Hosham EDC副センター長からプレゼンテーションがなされた。特に、教育の質管理について丹念に述べている印象があった。

引越し報告

医学部総合中央館が耐震補強改修工事に入るため、9月から3月末まで閉鎖されることになりました。二階にオフィスを構えていた当センターもそれに伴い、国際共同研究棟を一時移転先として7月中旬に引越しを行いました。

引越し先の国際共同研究棟は総合中央館から50mほどの距離にあり、利用できる部屋が多く、各部屋への距離も近く、センター全体の作業効率の意味でも協調の和を強くする意味でも、とてもいい労働環境です。

ただ、当センターのオフィスがある二階にあがるためには、外階段を利用するしか方法がなく、お体の不自由な方には来ていただくのに面倒をおかけしてしまうかもしれません。が、近くにお寄りになられた際はぜひ、お立ち寄りいただき、お言葉をかけていただければ幸いです。

総合中央館の工事が終了した後、5月ごろを予定に再び引越しを行います。今まで通り温かいお付き合いをいただきますようお願いいたします。

※郵便物等のあて先住所は今までと同様で結構です。





左より 賈、野原、片山、尾高、錦織、内田、北村、田中、大西、三浦、山本、澤山

センター日誌：2007年4月～2007年12月

| | |
|-------------------|--|
| ■ 4月1日 | 日中笹川医学研究者制度 第30期研究者 賈 志敏氏（南方医科大学）着任 |
| ■ 4月18日～12月 | M2臨床診断学実習 授業担当 |
| ■ 4月28～29日 | 岐阜大共催第24回医学教育セミナーとワークショップ（in 東大於山上会館） |
| ■ 4月30日～5月4日 | JBIC イスラム大学留学生受け入れ事業でイスラム大学訪問（大西） |
| ■ 5月21日～10月1日 | カルテの書き方実習 |
| ■ 5月23日～10月3日 | 模擬患者による医療面接実習 |
| ■ 5月23日～6月10日 | 東大拠点設置助成事業カプール医科大学訪問・医学教育ワークショップ指導 （武田：5月23日～6月4日、北村5月28日～6月10日） |
| ■ 5月28日～6月10日 | アフガニスタン医学教育プロジェクト JICA 短期専門家派遣（大西） |
| ■ 6月27日 | 平成19年度第一回運営委員会於医学部総合中央館310号室 |
| ■ 7月1日 | 片山亜弥研究機関研究員着任 |
| ■ 7月2～16日 | 医学部M2学生研究室配属 |
| ■ 7月17～27日 | 医学部M1、2学生フリークウォーター |
| ■ 7月18～20日 | 医学図書館改修工事のために、仮移転 |
| ■ 7月31日 | 武田准教授退任 三重大学地域医療学講座教授に栄転 |
| ■ 8月1日 | 田中紫技術補佐員着任 |
| ■ 8月3～4日 | センター内旅行（筑波山） |
| ■ 8月23～30日 | ヨーロッパ医学教育学会参加（大西） |
| ■ 8月25～28日 | 日中医学研究者制度20周年記念行事参加於北京人民大会堂（北村） |
| ■ 8月31日 | 医学部基礎臨床統合講義「医療・保健分野における国際協力」（大西） |
| ■ 8月29日 | JBIC インドネシア大学整備・保健医療人材育成事業案件形成促進調査 現地調査（北村：9月5日まで）、現地業務調整（片山：9月29日まで） |
| ■ 9月3日～16日 | アフガニスタン医学教育プロジェクト JICA 短期専門家派遣（大西） （9月3～8日マレーシア出張研修 於国際医学大学） |
| ■ 9月7日 | チュートリアル授業開始 |
| ■ 9月17日～28日 | JBIC インドネシア大学整備・保健医療人材育成事業案件形成促進調査 現地調査（9月17～22日北村）（9月19～28日大西） |
| ■ 10月1日 | 錦織宏助教着任 |
| ■ 10月3日～7日 | JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト事前調査（田中） |
| ■ 10月22日～11月1日 | JBIC インドネシア大学整備・保健医療人材育成事業案件形成促進調査 （現地調査：大西、現地業務調査：片山） |
| ■ 11月7日～12月13日 | 平成19年度アフガニスタン医学教育プロジェクト本邦研修実施 |
| ■ 12月7日 | 平成19年度第2回運営委員会於医学部国際共同研究棟2Fセミナー室 |
| ■ 12月5日～11日 | JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト現地活動（錦織） |
| ■ 12月13日～21日 | JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト現地活動（大西） |
| ■ 12月24日～1月5日（予定） | JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト現地活動（北村） |

このニュースレターの発行と客員外国人教授の招聘にあたって野口医学研究所に多大の御援助を頂きましたことを感謝申し上げます。

編集後記 ●●●

にわかには厳しい冬を感じ始めました。今期は新しいセンター長の下、スタッフも増え、新規事業も受注し、プロジェクトが発進し、変化の季節であったかと思います。4月には岐阜大と共催のWSもあり、秋からはチュートリアルも開始し、教員、学生の皆さんと交流できることを大変意味深いことと思っております。国際協力対象国もインドネシア、ラオスと増え、ますます皆様からのご協力やご指摘、ご教授がありたく存じております。どうぞこれからもよろしく願いいたします（野）。

発行元 ●●●

発行 2007年12月20日
 発行人 山本一彦
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
 TEL 03-5841-3583 FAX 03-5802-1845
 印刷所 三美印刷株式会社